

智積院庭園

<http://www.kyoto-arc.or.jp>

(公財)京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館



写真1 調査時の大書院と池（東から）

はじめに 智積院は真言宗智山派の総本山で、七条通が東大路通に突き当たる東山七条に位置します。広い境内の一面には昭和20年(1945)に国の名勝に指定された庭園があります。東山から傾斜する地形を利用して造られた築山の植栽や池岸に配置された景石など、端正な情景が大書院から眺められることで有名な庭園です(写真1)。この情景を維持するため、これまでも庭園の植栽や池の修理が行なわれてきましたが、経年変化による漏水、景石の傾倒などが見受けられるようになりました。そこで、学識経験者や行政機関からなる整

備委員会が設立され、護岸や築山の構造を調べて抜本的な修理を行なうため、平成22年度から10年をかけて発掘調査を実施しました。

寺の歴史 智積院は中世に紀州根来山内の寺院の一つとして創建された寺院でしたが、天正13年(1585)豊臣秀吉の兵火に遭い山内の堂塔伽藍は灰燼と帰してしまいます。玄宥僧正は弟子とともに難を逃れ、慶長6年(1601)徳川家康により京都東山の寺地を寄進され、五百佛山根来寺智積院と改め、仏教研学の道場として再興されました。寄進された寺地の中には豊臣秀吉の愛児鶴松の菩提を弔うため

に建立された祥雲寺がありました。天和2年(1682)に智積院は大火災に見舞われ、祥雲寺の頃の建物

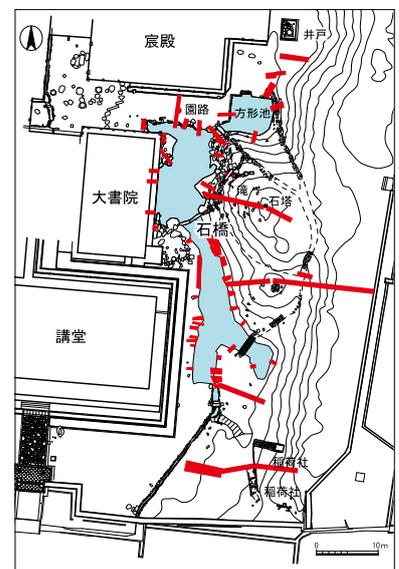


図1 調査位置（赤色が調査区）

をすべて失い、昭和22年(1947)の火災では、宸殿・大書院・講堂(客殿)が焼けています。現在の建物はこの火災後再建されたものです。平成4年(1992)の発掘調査で、焼けた講堂跡の下から祥雲寺客殿の遺構が検出されています。

庭園 大書院に面して築山を背景とし、築山からの滝の水を受ける南北に細長い池が設けられ、池水は^{おちえん}大書院落縁の床下にまで入り込む構成になっています。築山は^{ろざん}中国の廬山を、南北に細長い池は^{ちやうこう}長江を表しているといわれています。安土桃山時代の祥雲寺の庭園を基に、江戸時代に^{うんしやう}運敵僧正によって改修されたと史料にあります。

調査の概要 調査は築山や護岸、園路など各所で実施しました(図1・写真2)。池関連では、講堂前の池西側護岸は現在の石積み護岸ではなく、横板や胴木を杭で留める木製護岸があったこと、石橋南東部の護岸石は背後にもう一面を控える二重護岸であったことがわかりました。大書院北側では西に続く池が埋められていました。方



写真2 水を抜いた池と築山(南西から)

形池では護岸石下に胴木を据えていること、北側で見つかった瓦敷き石積みの溝は、築山からの雨水や湧水を方形池に誘導する溝であったことがわかりました。また、池底は地山である灰白色の土層が広がっているため、水が保たれていることもわかりました。築山では急峻な角度のため造成土や表土の崩落が起こり、踏み石や園路が埋もれたり、景石が傾いている所がありました。庭園の修復は、これらの調査成果を基に毎年行なわれました。

また建物では、昭和22年に焼失

した宸殿の礎石列と護岸近くまで施された^{しつくい たたき}漆喰三和土を検出し、消失前の宸殿は現在より南に位置していたことが判明しました。大書院縁下の調査では、天和2年と昭和22年の火災処理の整地層や再建された柱の根固めの下に一時期古い根固めを検出しました。大書院は、当初は池中に大きな石を礎石として池に張り出した構造でしたが、再建に際して北へ2.3m、西へ2.2m移動しています。『京都名園記』^{註1}に「大書院再建時、西側に三尺後退させた」とあることから、古い時期の根固めは移動前の大書院の位置を考える上で重要な発見といえます。

おわりに 寛政11年(1799)に刊行された『都林泉名勝図会』(図2)には、智積院の庭園が掲載されています。滝組石などの細部までは不明ですが、築山や石橋の位置などは現在の庭園と大きく変わらず、今も四季折々に桜、青葉、紅葉が変化に富み、多くの参拝者の目を楽しませてくれます。

(田中利津子)



図2 『都林泉名勝図会』巻三 (国際日本文化研究センター所蔵)
左に宸殿、右に石橋を渡る人物

註1 久恒秀治『京都名園記』(上巻1967)